

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
中沢2期地区埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

梨木平遺跡

1992. 3

上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
中沢2期地区埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

梨木平遺跡

1992. 3

上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会

序 文

このたび、上伊那地方事務所により中沢地区の農業用道路の整備事業が実施されることとなり、梨木平遺跡の緊急発掘調査を実施しました。

市内でも、中沢・東伊那区は特に遺跡の分布が濃い地域であり、梨木平遺跡も遺物の散布地としてしらしていた遺跡です。今回の調査区域はその散布地からはずれた所にあり、また下間川へと下る傾斜地に位置しているため、遺跡の周辺区域であろうと予想されましたが、遺跡から流れてきた遺物があるかもしれないとの検討によって発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では遺構の検出はなく、遺物もごく僅かの出土があったのみで、それ程の成果をあげたとはいひ難いのですが、遺跡の範囲を確定する一資料にはなるのではないかと考えます。

ご指導いただきました県教育委員会文化課をはじめ、事業にご理解をいただいた上伊那地方事務所土地改良課の方々、病気療養中にも関わらずご指導いただいた調査団長の林茂樹先生、また炎天化の中、現場作業をしていただいた地元の皆様に深く感謝申し上げますとともに、ここに簡易な形ではありますが調査報告書を作成し、報告とさせていただく次第であります。

平成4年3月3日

駒ヶ根市教育長 高 坂 保

例 言

1. 本書は平成3年度に行われた農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う梨木平遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は上伊那地方事務所長と駒ヶ根市長との委託契約に基づいて行われた。
3. 調査の中での測量、写真撮影は北澤武志が行った。
4. 本報告書は林茂樹と北澤が執筆し、林が監修した。
5. 調査に伴う、遺物、実測図、写真、地層サンプル等の関係資料は駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

序 文

例 言

目 次

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査経過	2
第II章 遺跡の環境	2
第1節 位置と地形・地質	2
第2節 歴史的環境	3
第III章 発掘調査	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の概要	5
第3節 地層調査	5
第IV章 総括	7

図版目次

第1図 梨木平遺跡位置図	9
第2図 中沢地区周辺遺跡分布図	10
第3図 調査区位置図	11
第4図 調査区内断面実測位置及び遺物出土位置	12
第5図 東調査区地層断面図(1)	13
第6図 東調査区地層断面図(2)	14
第7図 東調査区地層断面図(3)	15
第8図 西調査区地層断面図(1)	16
第9図 西調査区地層断面図(2)	17

写真目次

写真1…1.東調査区遠景 2.西調査区遠景 3.東調査区調査前状況	
写真2…1.東調査区調査前状況 2.東調査区 3.西調査区	
写真3…1.西調査区地層確認トレンチ 2.東調査区地層確認トレンチ 3.東調査区トレンチ内地層状況	
写真4…出土遺物	

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市中沢地区における農道工事に先立ち、平成2年9月5日に現地にて、上伊那地方事務所、長野県教育委員会、駒ヶ根市教育委員会の三者で、埋蔵文化財の保護協議が行われた。

県教育委員会の指導に基づき、事前に発掘調査を実施し記録保存をはかることとなり、平成3年6月1日付埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、平成3年6月26日に上伊那地方事務所長と駒ヶ根市長との間で委託契約が行われ、平成3年8月12日には駒ヶ根市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で再委託契約を結び、発掘調査会は梨木平遺跡発掘調査団を編成し、団長には林茂樹氏をお願いして、平成3年8月27日から平成3年9月22日まで現場での作業を実施した。なお各委託契約について委託料の変更のため平成4年2月20日付で変更契約を行っている。

第2節 調査の組織

《駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会》

顧問	中山 敬及	(駒ヶ根市教育委員長)
会長	高坂 保	(駒ヶ根市教育長)
理事	友野 良一	(駒ヶ根市文化財審議委員会会长)
"	松村 義也	(駒ヶ根市文化財審議委員会副会長)
"	竹村 進	(駒ヶ根市文化財審議委員会委員)
"	林 趟	(")
"	吉江 修深	(")
"	新井 徳博	(")
"	河合 龍夫	(駒ヶ根市教育次長)
"	福沢 正浩	(駒ヶ根市立博物館長)
監事	宮脇 昌三	(駒ヶ根郷土研究会会长)
"	下平 基雄	(駒ヶ根市収入役)
幹事	気賀沢 喜則	(駒ヶ根市教育委員会社会教育係長)
"	中村 敏郎	(" 社会教育係)
"	北澤 武志	(駒ヶ根市立博物館職員)
"	白沢 由美	(")

《梨木平遺跡発掘調査団》（事務所 駒ヶ根市上穂栄町23番1号 駒ヶ根市立博物館内）

團長 林 茂樹（日本考古学協会会員）

調査員 小町谷 元（上伊那考古学会会員）

調査主任 北澤 武志（駒ヶ根市立博物館）

作業協力員 湯沢正常 野溝武雄 小倉敏夫 竹村正久 竹村豊一

第3章 発行 施設調査経過

- 8月27日～9月2日 現場草刈り、器材運搬、調査区設定、表土除土、トレンチ堀り。
- 9月3日（火） テント設営後調査開始式。西調査区堀り下げ。土器片1点出土。
- 9月4日（水） 西調査区堀り下げ完了。東調査区堀り下げ開始。鉄釉陶器出土。工事B.M. から調査用ベンチマークを設定。
- 9月5日（木） 西調査区南壁断面清掃と実測。東調査区地層確認トレンチ壁面カット。
- 9月6日（金） 西調査区地層確認トレンチ断面実測。東調査区堀り下げと地層確認トレンチ内の堀り下げ。
- 9月7日（土） 西調査区平板実測、地層確認トレンチ南壁断面実測。東調査区地層確認トレンチ内堀り下げ。
- 9月10日（火） 東調査区断面清掃及び実測。
- 9月11日（水） 東調査区断面実測、地層確認トレンチ壁面断面実測。調査区内清掃。
- 9月12日（木） 写真撮影。調査終了式後器材整理。
- 9月20日（金） 地層確認トレンチ内清掃と写真撮影。東調査区平板実測。器材整理。
- 9月21日（土） 東調査区地層トレンチ断面観察及び土壤サンプル採取。
- 9月22日（日） 器材運搬。

第II章 遺跡の環境

第1節 位置と地形・地質

1. 位置（第1・3図、写真1）

梨木平遺跡は駒ヶ根市中沢菅沼区に所在し、北緯35度43分20秒、東経 137度59分18秒の旧中沢小学校位置元標より南西方向へ約 600m の所に位置する。これまでの表面採集例から遺跡の主体部は市道穴山線の南側一帯であるとみられており、今回の調査区は道路北の傾斜地にあたる。調査区域の地番は駒ヶ根市中沢2197-14、2197-12、2217-11、2217-12、2242-44、2242-45、2242-48、2242-49 である。調査区の標高は632～638mで、天竜川との比高は72～78mをはかる。

2. 地形（第1・3図、写真1・2）

赤石山脈の西側に平行して走る伊那山地に属する陣馬形山から流出し、天竜川へとそそぐ下間川は山麓を開析し左右に河岸段丘を形成している。梨木平遺跡は下間川左岸の丘陵上に位置し、南側は山麓で、北側を流れる下間川へと下る北向きの傾斜地に立地している。この付近は戦前、山麓から下間川まで一帯が山林であったものを、戦時中また戦後開墾し、桑畠や畑として利用されている。遺跡の北側、下間川の段丘崖には井筋である北沢井が流れている。

下間川の対岸は、東西 2,500m、南北 600mの中沢丘陵となっており、天竜川へとのびる扇状地が新宮川・下間川によって開析されて台地状段丘地形となっており、中沢地区の中心となる町並みが発展している。

また、伊那盆地を流れる天竜川の左右には河岸段丘を見ることができ、中沢地区には5段を数える段丘面が形成されている。昭和62年度に発掘調査が行われた古城南遺跡の報告書では、5段の段丘をそれぞれ、川床から1—ナギハバ面（560m）、2—西原面（616m）、3—菅沼面（630m）、4—東原面（645m）、5—高見原面（660m）と仮称し区分しているが、本遺跡は3の菅沼面に相当する。

3. 地質

当地域は中央構造線の西側に位置し、地質的基盤は領家帯に属する。中沢地区付近では領家変成岩類と領家花崗岩類とが入り組んでおり、複雑な様相を呈する。

この上部には変麻岩、花崗岩、砂岩、変成輝緑岩、頁岩、泥岩などの礫が厚く堆積しており、段丘疊層を形成している。さらにその上は50km西にある御岳山等の火山灰により覆われている。

このテフラ層については、調査の中で地層確認のためのトレンチを掘り、観察を行っているので、第三章第3節で述べることとする。

第2章 历史的環境（第2図）

当遺跡は、昭和23年中沢中学校の農業実習用地として原野を開墾造成した際、土師器、灰釉陶器が出土し採集され、遺物包含地として確認・登録された。その後市道整備の工事で縄文早期土器片が採集されている。開墾時、中沢中学校教諭林茂樹が採集した土師器破片は、坏上部3片、土師器としては後期または末期に属するもので、伴出の灰釉陶器焼破片は、東濃窯産のものであった。（現市立東中学校郷土資料室所蔵）（林）

中沢地区の新宮川、下間川流域には数多くの遺跡の分布が確認されており、時代ごとに概観してみたい。

〔縄文時代〕

天竜川左岸の第2段丘面には古城南（6・中期）があり、続いて新宮川沿岸に柴（8・後期）がある。第3段丘には東原（14・中期）、久保垣外（16・中期）、日向（20・中期）、持木平（18・中期）がある。第4段丘では的場（31・早期、中期）、門前（33・中期、後期）、上垣外（30・中期）が高見原丘陵の基部に分布している。

下間川流域には梨木平（1・中期）をはじめ、細久保（21・中期）、小山Ⅲ（32・後期）がある。新宮川右岸には五郎垣外（9・中期）、太座垣外（11・早期）、配石遺構をもつ小林（10・中期）がある。

〔弥生時代〕

弥生時代になると遺跡数は急に減り、菅沼の上の原（後期）、久保垣外（16・後期）、羽場前（23・後期）に遺物が散見する程度である。

〔古墳時代〕

古墳時代においてもこれまでしられている遺跡はほとんど無く、古式須恵器が細久保（21）で出土している程度である。

〔奈良・平安時代〕

この時期になると中沢丘陵の周辺で遺跡が数多く見られ、丘陵上に東原（14・平安）、久保垣外（16・平安）、徳光地（13・平安）、的場（31・平安）、門前（33・平安）、一本柿（29・平安）があり、新宮川の低位面には坪の内（27・平安末）がある。

また下間川流域には灰釉陶器が出土する遺跡が多く、梨木平（1）、横山（15）、小山Ⅱ（22）、小山Ⅰ（24）、日向（20）、的場（31）等がある。なお古城南（6）では、奈良時代末の住居址2軒の発掘が行われている。

〔鎌倉・室町時代〕

中世においては、的場（31）、一本柿（29）、白山城（28）、坪の内（27）、香花社（26）、高見城（25）、町（19）、日向（20）、高見原（17）、横山（15）など中沢丘陵に多くの遺跡が集中する。

城館址では室町時代中期の単郭方形居館址を検出した小山Ⅰ（24）、館址の発掘があった高見原城（17）、周濠跡が発見され古式城郭と認められる香花社（26）、単郭長方形の郭が遺存する白山城（28）、二つの郭及び掘跡を残す高見城（25）、高見城の西に位置し橋形、直線道路、町屋割を残す町（19）が丘陵周辺に分布する。また高見城の東方1kmには左越城が位置する。新宮川流域では曾倉館址（12）、原城が、中曾倉区には単郭方形の模式的城郭を残す中村城の存在が知られている。天竜川第2段丘の周縁部には複郭を持つ古城（7）が、下間川をはさんで本遺跡の対岸には主郭、副郭、帯郭、空堀、樹形道路などを明確にとどめている菅沼城（3）が城郭址として残っている。

なお菅沼には明徳三年の宝篋印塔（4）があり、現在は常秀院（5）参道脇に移転されている。

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の方法(第3・4図、写真2)

農道工事は下間川の段丘崖及び縁に一部かかる範囲で計画されており、発掘対象区域内で段丘上の比較的傾斜が緩やかな箇所に東調査区(前196)と西調査区(前111)とを設定した。両調査区の間は工事による切土が僅かにかかる程度で、傾斜も急であるため調査は実施しなかった。調査区の設定は任意とし、後から工事計画時の用地測量杭との位置関係を測量し調査区位置の特定をはかった。また標高については、値が求められている工事用のベンチマーク(626.131m)から測定し、調査用のベンチマークを設け使用した。掘り下げは黄褐色テフラ(ローム)層を一部掘り込む深さまでとし、遺物等の確認に努めた。写真による記録は、35mmのモノクロームネガフィルム及びカラーネガフィルムを使用して撮影を行った。両調査区にはそれぞれ地層確認のためのトレンチを設定し、地層の堆積状況の調査も合わせて行っている。

第2節 調査の概要(第3・4図、写真4)

現地協議の折、遺物の散布がこれまで確認されている区域の外であり、丘陵の周縁の傾斜地であるため遺構の検出は期待できず、上方にある散布地からの流れ込み、あるいは廃棄による遺物があるかもしれないとの検討があつて調査を実施した。

調査区域は山林開墾の後、畠地として主に利用されており、ローム層までの表土が浅く攪乱を受けており、遺物包含層は無く、また遺構の検出も無かった。

出土遺物2点は二次堆積のローム層上面から出土しており、上方の遺物散布地からの流入によるものである。写真4の上の土器は土師器壊破片である。厚さ7mmで、胎土は淡茶褐色できめが細かく径1mm程の長石、石英、雲母などを含む。内外面ともナデによる調整を行っている。時期は平安時代のものと思われる。写真4の下の陶器は常滑焼大甕の破片である。破片部位での直径は50~60cm程度で、厚さは11mm。胎土は淡赤褐色できめが細かく、細かい砂粒がわずかに混じる。内面は光沢のある鉄釉、外面は青味がかった茶褐色の釉をかけている。時期は近世末のものと思われる。

第3節 地層調査

1. 地層調査の概要(第4~9図、写真3)

東調査区に長さ12.6m幅2.5mのトレンチを設定し、約2m下まで掘り下げたが礫層まで至らず一部手堀りによって粘土層まで確認するのにとどまった。西調査区には長さ5.6m幅1.5mのトレンチを設定し、礫層の現れる深さ約1.5mまで掘り下げた。トレンチ壁面は南壁と東壁とを削り、分層をし、断面の実測を行った。

分層は肉眼等で行い、上から下へローマ数字を使用し各層を表わした。両トレンチ間ではそれぞれ層位は対応するものとしてとらえたが、両者間で若干の相違が見られるので別に観察を記すこととする。

また東調査区のトレンチでは、明確に区分できる層及び黄褐色テフラでは5cmの間隔をおき10cm毎の土壤サンプルを採取した。詳細な調査については別の機会に譲ることとする。

また、両調査区の南壁断面の一部で断面図をとり、堆積状況の観察を行っている。

2. 東調査区地層確認トレンチの断面観察（第5・6・7図、写真3）

I層 - 暗茶褐色土

耕作土であり、腐食はあまり進んでいない。耕作による擾乱を受けている。

II層 - 茶黃褐色土（ソフトローム）

下方へ行く程幅が狭くなり、上方からの二次堆積土。

III層 - 茶黃褐色土（ハードローム）

III' 層粒・塊を含む。固く締まりクラックあり。

IV層 - 軽石層 Pm - IV

赤褐色の軽石層。層状の堆積でなく、ブロック状にIII層中に散らばる。

IV層 - 軽石層 Pm - II'

茶黄色の軽石層。VI層より粒が細かく、青灰色、黒色等の外来岩片散在。

V層 - 灰褐色土

締まりなく柔らかい。

VI層 - 軽石層 Pm - I

黄色の軽石層（味噌土）。1cm以下の粗粒。黒色岩片を含む。

VI' 層 - 軽石層 Pm - I (白土)

VI層がカオリン化したもの。

VII層 - 暗灰褐色粘土

非常に細かい砂を含む。この下層には砂を含む青色粘土層がある。

3. 西調査区地層確認トレンチの断面観察（第9図、写真3）

I層 - 暗茶褐色土

耕土。東調査区より腐食化が進んでおり色が濃い。二次堆積土。

II層 - 茶黃褐色土（ソフトローム）

締まりなく柔らかい。上からの二次堆積土。

III層 - 茶黃褐色土（ハードローム）

西調査区南壁断面で見られるが、トレンチ内では無い。

III' 層 - 軽石層 Pm - IV

当トレンチにおいては見られない。

IV層 - 軽石層 Pm-II'

断面実測面には見られず、南壁のVI層、VI'層の上部に一部表れていた。

V層 - 灰褐色土

トレンチ南寄りに見られ、下方では流されていて無い。

VI層 - 軽石層 Pm-I

断面実測面には見られず、V・VI層の高さでトレンチ西壁に一部露出していた。

VI'層 - " (白土)

断面実測面には見られず、V・VI層の高さでトレンチ西壁に一部露出していた。

VII層 - 暗灰褐色粘土

固く、クラックが多数走る。1m大の花崗岩、砂岩を含む。部分的に鉄分が酸化している。

G-花崗岩、S-砂岩 花崗岩は、粗粒で脆い竜東地区特有の花崗岩である。

4. 調査区地層断面

(1) 東調査区南壁断面(第5図)

上からI、II、III層の順に堆積している。III層は所々固い箇所があり、層中にはIII'が散在する。桑畑のため擾乱を随所に受けている。

(2) 西調査区地層断面(第8図)

上からI、II、III層の順に堆積している。III層は非常に固いブロックから成り、整地の折の擾乱を受けている可能性がある。またIII'を含まない。

第IV章 総 括

今回の調査では、傾斜面による表土の流動に伴う古代、近世期の遺物が2点出土したのみで、遺構の検出も無く、梨木平遺跡の内容を把握するには至らなかった。遺跡の主体部はこれまでの表面採集例で知られていたとおり、市道穴山線の南側の山麓部から丘陵部にかけて存在していると思われ、今回の発掘調査区域まで及んでいないことを確認した。

また合わせて実施した地層調査は十分なものとは言えないが、今後、天竜川左岸のローム層堆積状況を把握する一資料として重要である。從来から問題とされるローム最上層のソフトロームは斜面下方へ移動し再堆積した可能性が認められる。

梨木平はこれまで縄文時代及び平安時代の遺物散布地として知られていた土地であるが、特に中世祭祀遺構の存在も予想される重要な遺跡であり、今後の保存や調査に努力すべき地籍である。

今後のために、その重要性の意義についてここで述べておきたい。

この地籍は「中沢一の宮神社跡地」と称されており、近くの住民のうち古老の人々は、幼時に見聞した状況を記憶しており、明治末年に撮影された写真も現存する(「中沢の明治・大正・昭和」写真集に掲載)。これによると、天竜川を下方に望む丘の上に十数本の赤松の巨木から成る

森があり、その中に鳥居、社殿が建っている風景であり、格式のある神社と思われる。

「中沢村誌」（大正11年中沢村役場編）によると、明治41年11月村社一の宮神社を菅沼福岡社に合祀したことを明記し、祭神を建御名方命とし、社殿は福岡社の在来神誉田別命とは別棟にしたようである。この合祀は、当時全国的に行われた神祇官による神社の統合令に伴ってのことであった。

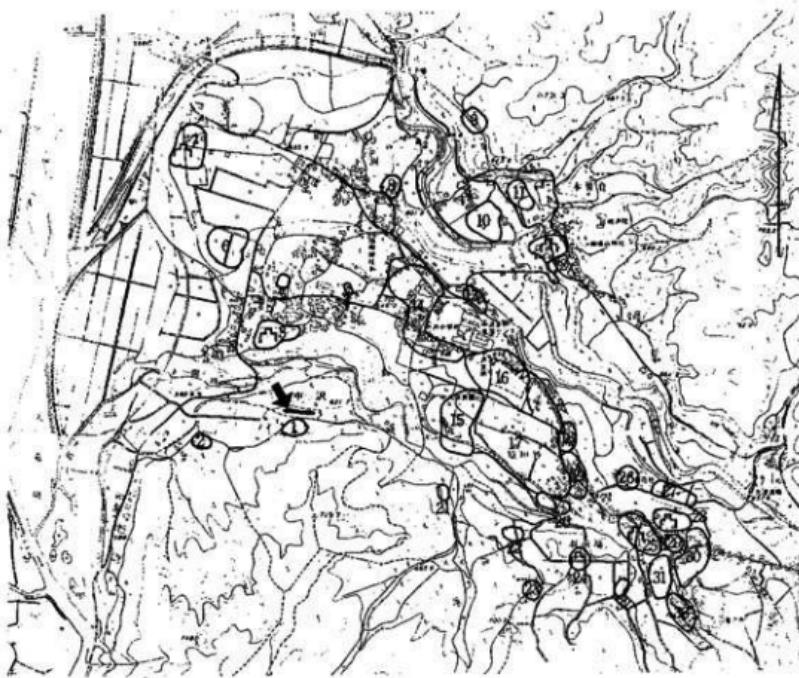
これについて「一の宮」は重要な名称である。すなわち、「一」は行政区または地域内の最高位を示す「一」であり、この場合は「中沢郷一の宮」である。中沢郷地頭職中沢氏は諏訪神氏の分流で、12世紀には中沢郷地頭としてこの地に在住し、三峯川以南、陣馬形山以北一帯を領有していた。吾妻鏡に記されている諏訪神社社領としての中沢郷であり、神氏直系の中沢氏であるから氏神として諏訪神奉斎は当然であり、中沢氏の奉斎した一の宮であることは想像に難くない。

建御名方命は藤政時代から、氏神として11村に10社祀られており、まことに諏訪信仰圏の状況を如実に示していることは、中沢氏統治の影響を遺存している現象と見做してよいであろう。前述の出土土師器片は直接この社殿跡に関係したものと思われる。

一の宮神社敷地は、今回の東調査区の南方、市道穴山線を隔てた小高い畠地と推定されるが今後、充分な关心を以てこの保存と調査を完全に行うべきものと思われる。 (林)

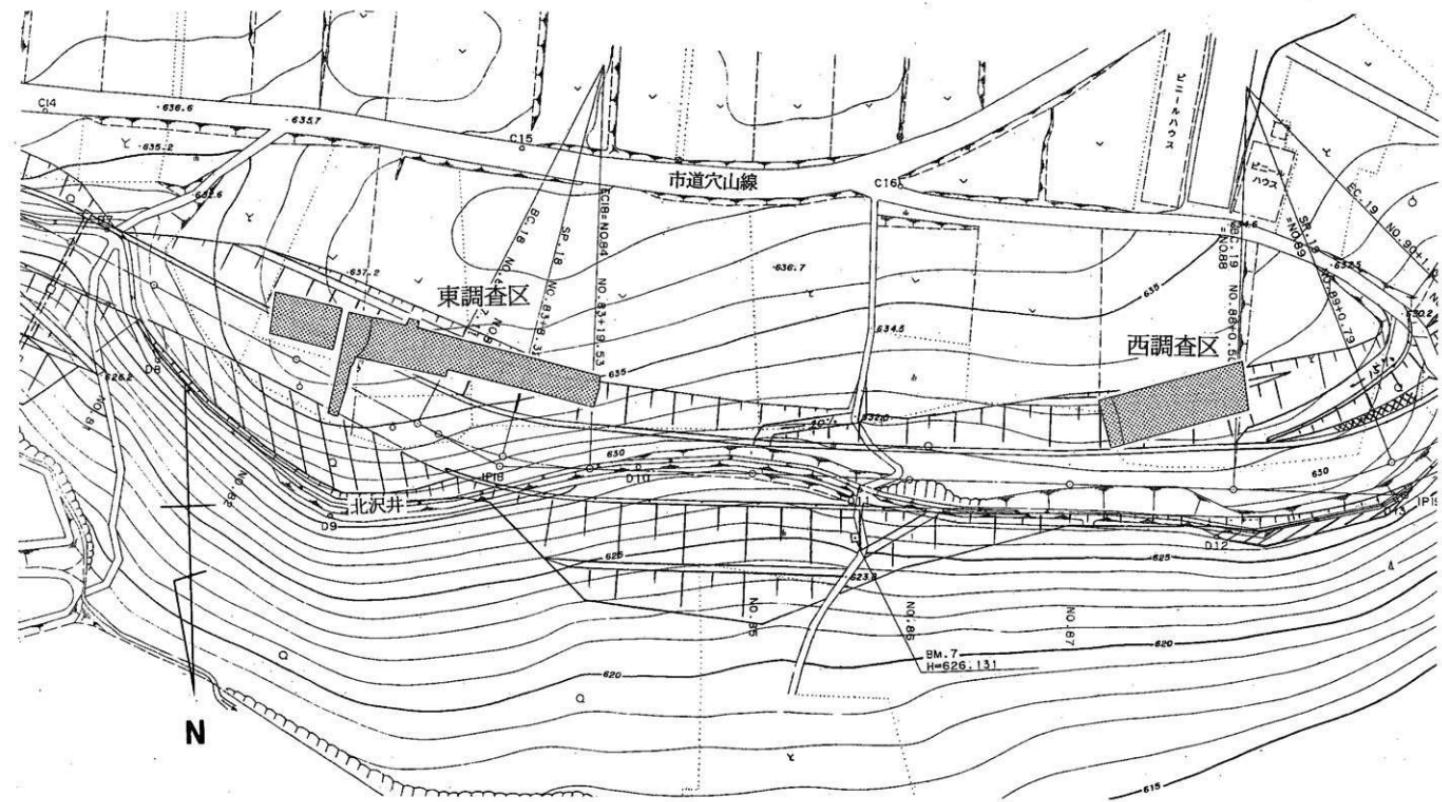


第1図 梨木平遺跡位置図 ($S=1:50,000$)

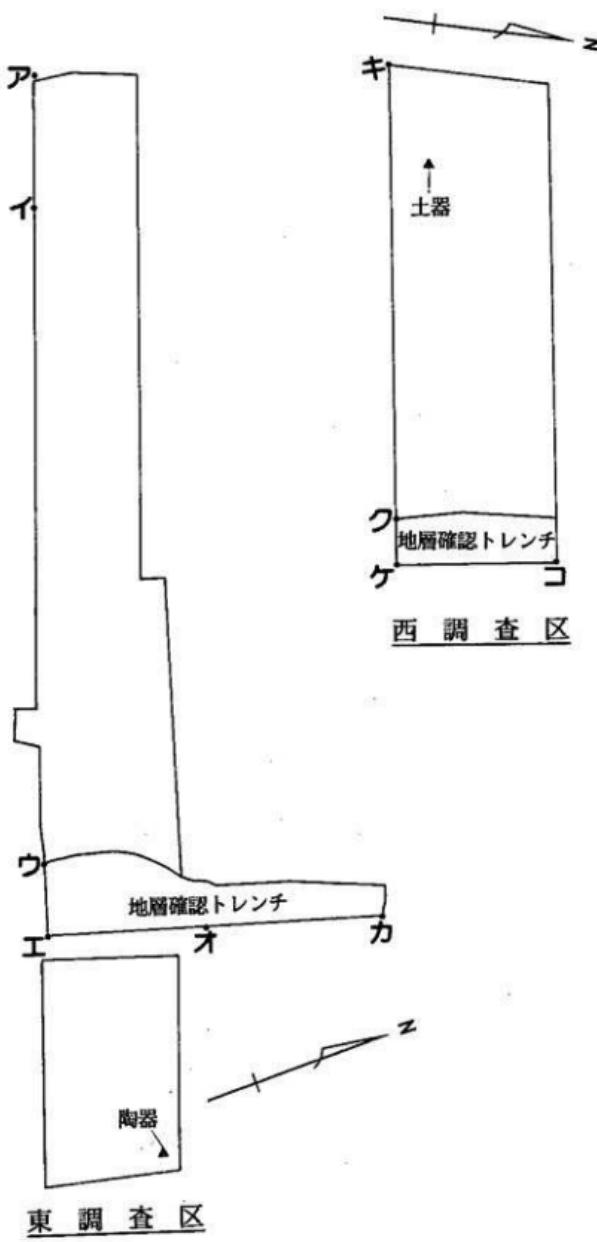


- | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|
| 1. 梨木平 | 10. 小林 | 19. 町 | 28. 白山城址 |
| 2. 菅沼 | 11. 太座垣外 | 20. 日向 | 29. 一本柿 |
| 3. 菅沼城址 | 12. 曾倉館址 | 21. 細久保 | 30. 上垣外 |
| 4. 菅沼宝篋印塔 | 13. 徳光地 | 22. 小山第Ⅱ | 31. 的場 |
| 5. 常秀院 | 14. 東原 | 23. 羽場前 | 32. 小山第Ⅲ |
| 6. 古城南 | 15. 横山A | 24. 小山第Ⅰ | 33. 門前 |
| 7. 古城 | 16. 久保垣外 | 25. 高見城址 | |
| 8. 柴 | 17. 高見原 | 26. 香花社 | |
| 9. 五郎垣外 | 18. 持木平 | 27. 坪の内 | |

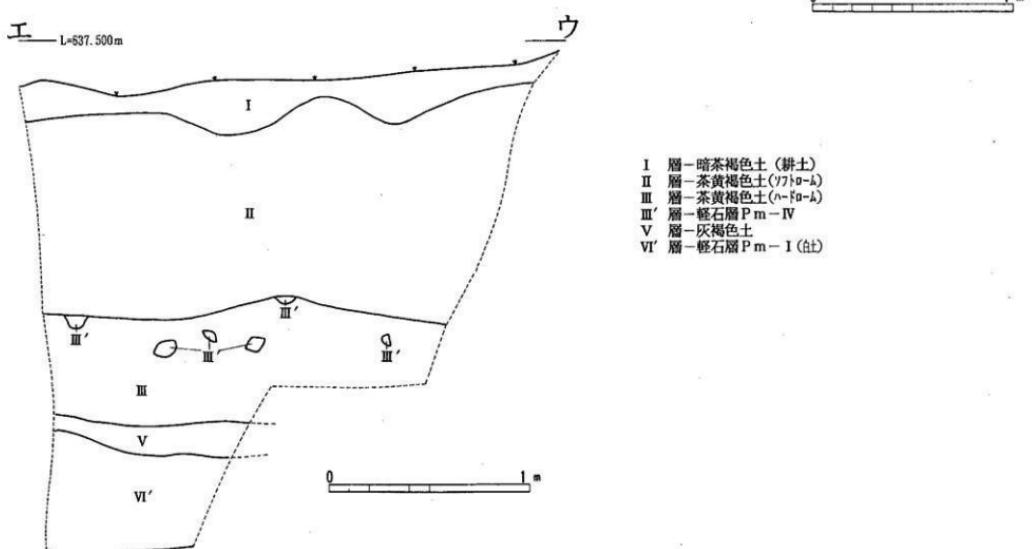
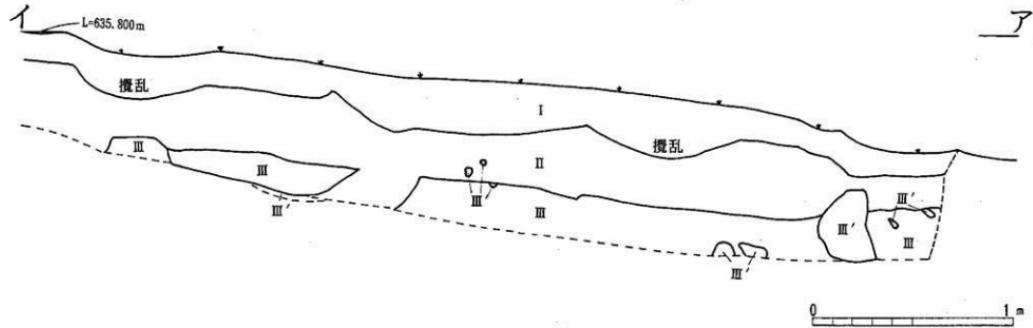
第2図 中沢地区周辺遺跡分布図 (S=1:20,000)



第3図 調査区位置図 (S=1:500)

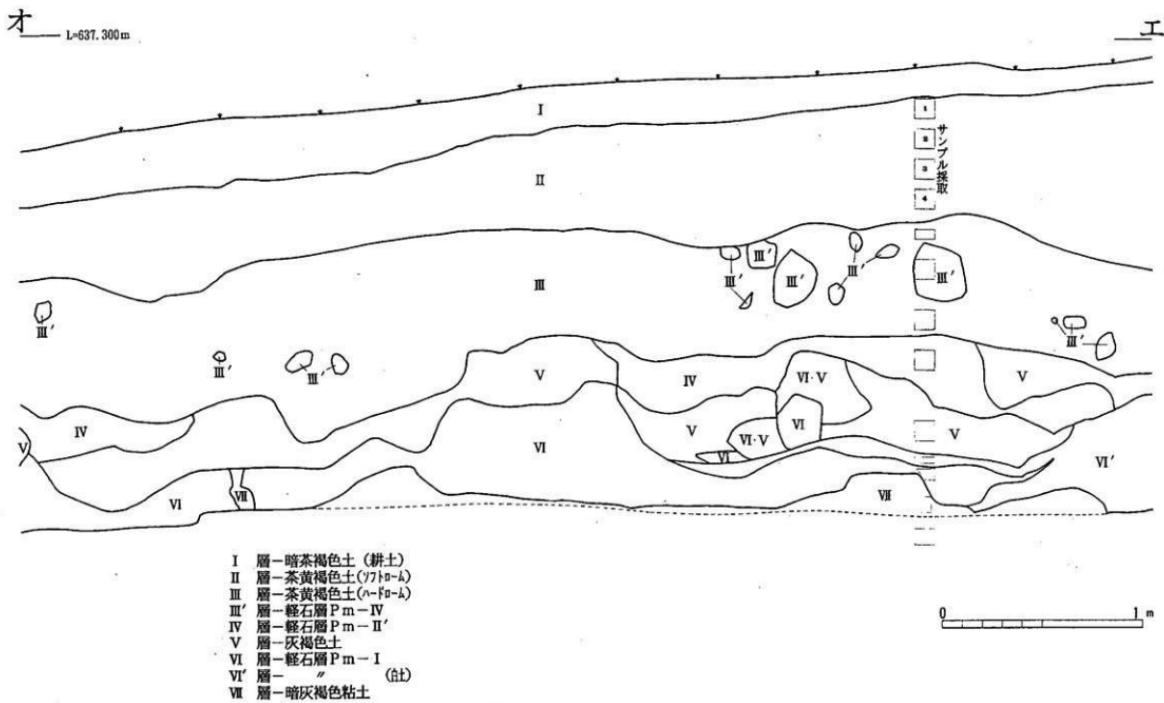


第4図 調査区内断面実測位置及び遺物出土位置 (S=1:210)



- I 層—暗茶褐色土（耕土）
- II 層—茶黃褐色土（じやうしょく）
- III 層—茶黃褐色土（じやうしょく）
- III' 層—輕石層 Pm-IV
- V 層—灰褐色土
- VI' 層—輕石層 Pm-I (柱)

第5図 東調査区地層断面図(1) (S=1:20)



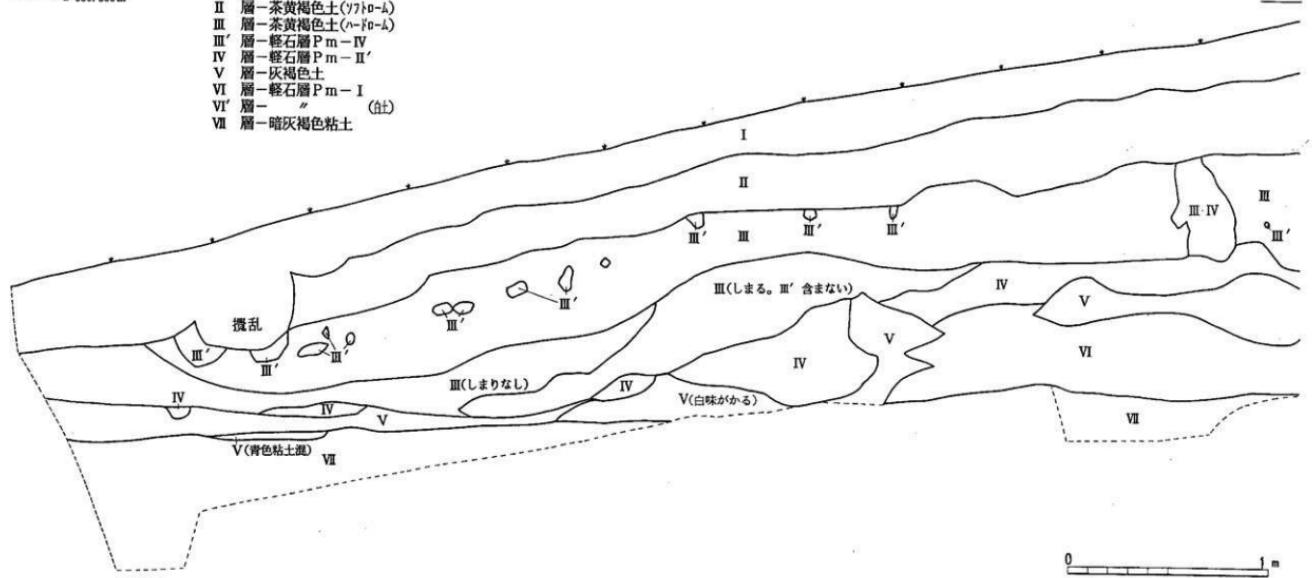
第6図 東調査区地層断面図(2) (S=1:20)

力

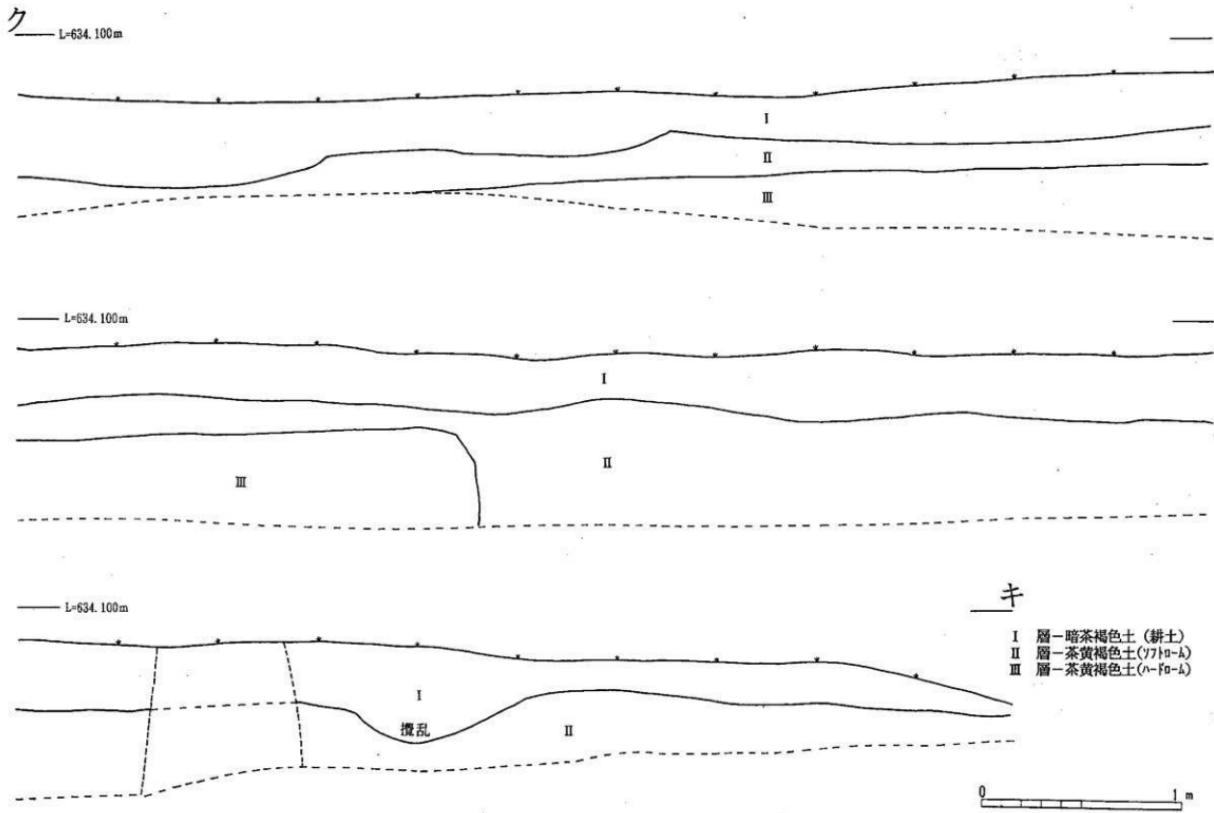
L=636.800m

才

- I 層一暗茶褐色土(耕土)
 II 層一茶黃褐色土(γ7±0-1)
 III 層一茶黃褐色土(γ-γ±0-1)
 III' 層一輕石層 P m - IV
 IV 層一輕石層 P m - II'
 V 層一灰褐色土
 VI 層一輕石層 P m - I
 VI' 層一" (估)
 VII 層一暗灰褐色粘土



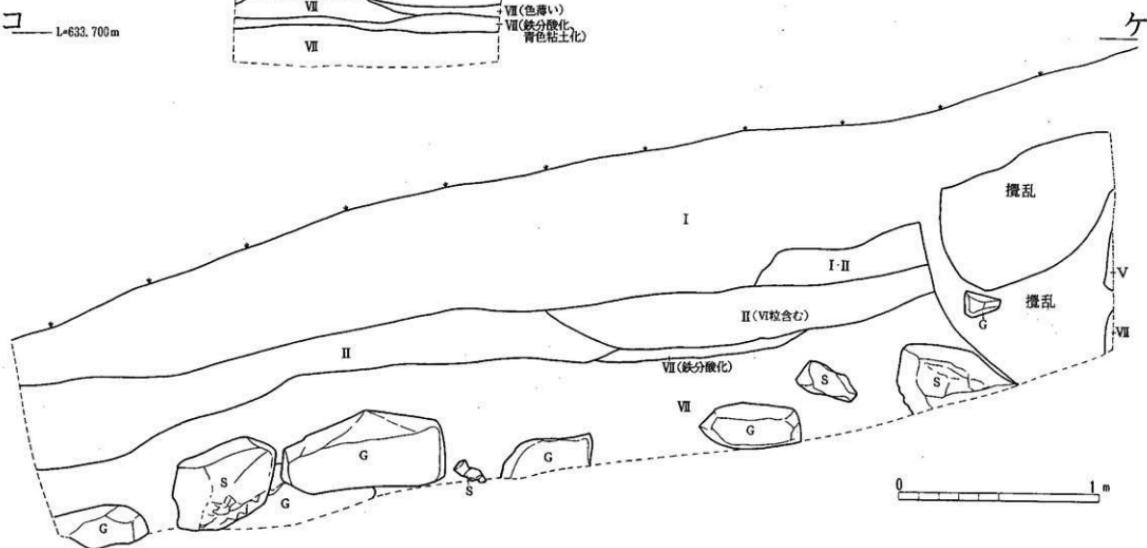
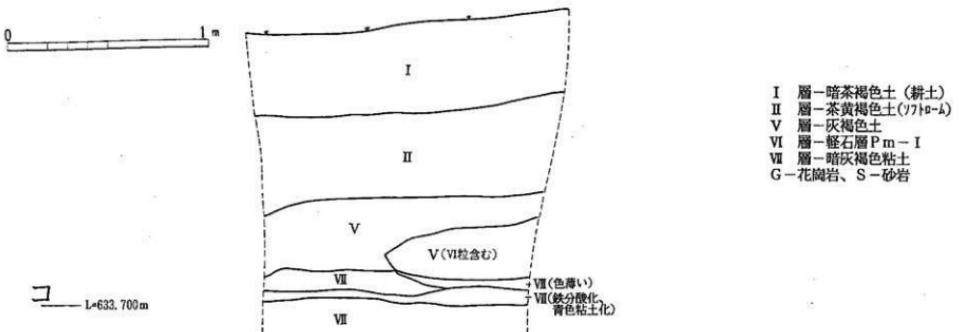
第7図 東調査区地層断面図(3) (S=1:20)



第8図 西調査区地層断面図(1) (S=1:20)

ヶ L=634.100m

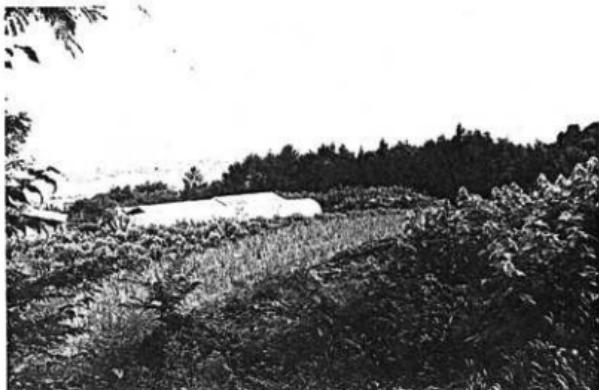
ク



第9図 西調査区地層断面図(2) (S=1:20)



1. 東調査区遠景 南方から(中央の樹より奥、後方は中沢丘)



2. 西調査区遠景 南方から(ハウスより奥)



3. 東調査区調査前状況 西方から

写真 1



1. 西調査区調査前状況 東方から



2. 東調査区 西方から



3. 西調査区 東方から

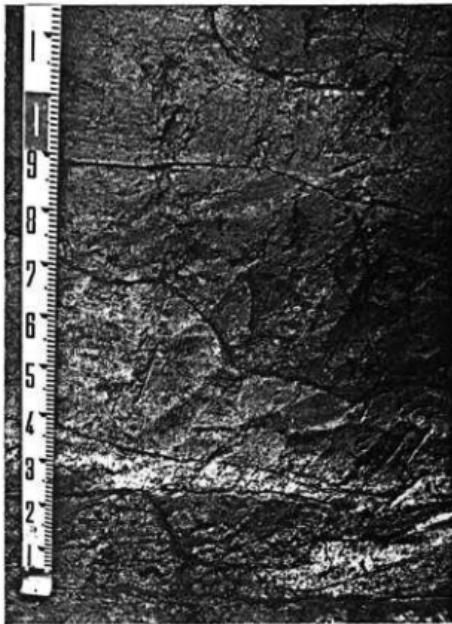
写真 2



1. 西調査区地層確認トレンチ 西方から

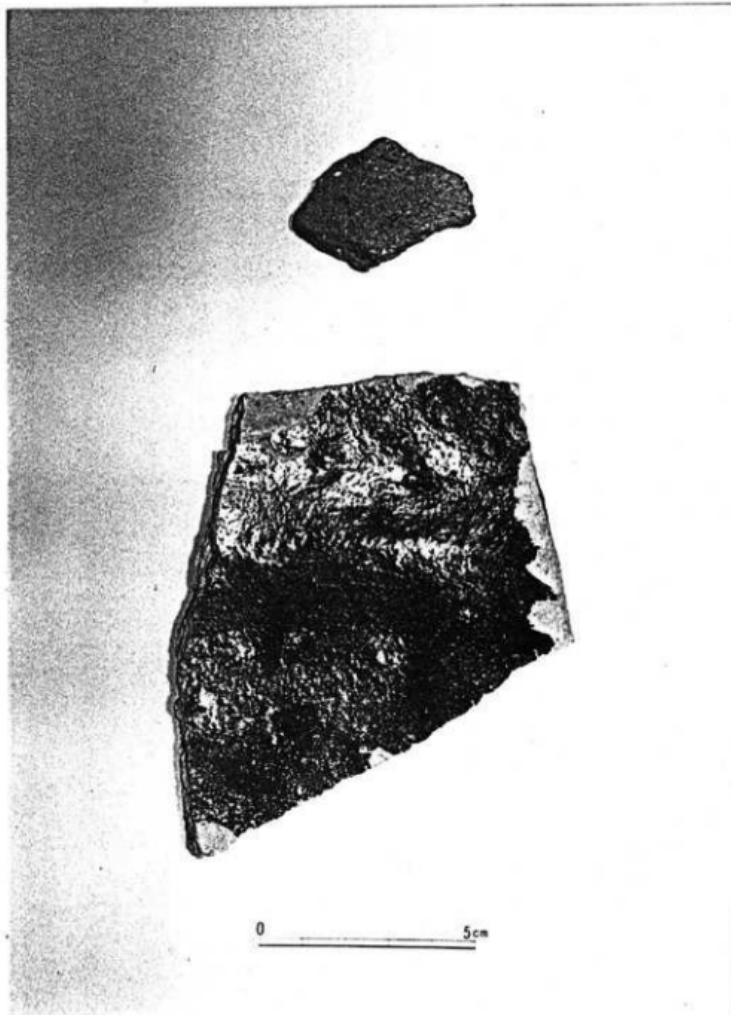


2. 東調査区地層確認トレンチ 東方から



3. 東調査区トレンチ内地層状況(第6跡)

写真 3



出 土 遺 物 (上 土師器片・下 陶器片)

写真 4